

2015 **第八回** 台日原住民族研究論壇
日台原住民族研究フォーラム
8th Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies

太魯閣族抗日戰爭史
Endaan tmgjijai 學術研討會
Truku ni Nihung

タロコ族対日戦争史(タロコ戦役)シンポジウム
Conference on History of the Truku-Japan War

論文發表 第5場次

山田仁史

台湾原住民族の首狩：人類史におけるその位置

(會議論文未經作者同意不得轉載引用)

台湾原住民族の首狩：人類史におけるその位置

山田仁史

東北大学大学院文学研究科 准教授

【要旨】

発表者は今年、『首狩の宗教民族学』（筑摩書房、2015）を出版し、台湾原住民族における過去の首狩慣行についてもくわしく論じた。このテーマがある種タブー視されてきたことは承知している。しかし、1999年に金子えりかが「歴史的な慣習としての首狩、そして、過去を克服する必要」という論文を発表し、同年国立台湾博物館において「文面・馘首・泰雅文化」と題する特別展が開催されて以来、状況は変化した。

我々は今、かつての偏見から解放されて、台湾原住民族における首狩の諸相を、人類史全体の中に位置づけることができるところまで来ている。おおまかに言えば、首狩という行為は初期農耕民の間に盛行し、とりわけ東南アジア各地において20世紀に至るまで行われてきた風習である。それらには、実際の遂行場面においても、背景をなす観念や物質文化においても、多くの共通点がみられる。

そして、もっと敷衍するなら、人間の頭部に対する固執の心理は首狩のみならず、人類史に広く見出すことができる。たとえばギロチンなどの斬首刑もそうであるし、日本で中世・近世におこなわれた首取（くびとり）も同様である。さらには太平洋戦争においてアメリカ兵が記念に持ち帰った日本兵の頭骨も、近年再発見されている。発表者はこれらの諸点を論じることで、昨年逝去された金子えりか先生から受けた学恩に、少しでも報いるとともに、台湾原住民の方々が過去に受けてきた汚名を多少ともすすぐ一助としたいと考えている。

キーワード：首狩、人類史、初期農耕民、頭部

台灣原住民族的出草：在人類史中的位置

山田仁史

東北大學大學院文學研究科 准教授

【摘要】

發表者今年出版了《獵首的宗教民族學》（筑摩書房、2015），詳細論述了台灣原住民族過去的出草習慣。發表者知悉此一主題一直被視為某種禁忌。但，在1999年，金子えりか發表了「作為歷史性慣習的獵首，然後，有克服過去的必要」的論文，同年，在國立台灣博物館，舉辦了以「文面・馘首・泰雅文化」為題的特別展之後，情況發生了變化。

我們現在正從曾有的偏見中解放，來到得以將台灣原住民族的出草多面向定位在人類史全體的位置當中。大致說來，出草此一行為盛行於初期農耕民之間，特別是在東南亞各地，甚至到20世紀都一直是在進行的風俗習慣。在這些出草當中，無論是實際的執行情況，或形成背景的觀念與物質文化等，皆可見諸多的共同點。

因而，進一步詳述的話，對人類頭部的固執心理，不只是出草，在人類史中也能夠廣泛地發現。例如斷頭台的斬首也是如此，而且在日本中世、近世進行的斬首也相同。近年，也更再發現了在太平洋戰爭中，美國兵為作紀念帶回了日本兵的頭骨。發表者將闡述這些論點，想盡可能地報答去年逝世的金子えりか老師之恩，同時，也想為台灣原住民諸位從過去一直以來受到的污名，多少給予一點幫助。

關鍵詞：出草、人類史、初期農耕民、頭部

（譯者：廖彥琦）

1 はじめに

私は今年3月、『首狩の宗教民族学』という本を出版した（山田 2015a）¹。ここで伝えたかったのは、首狩という、一見すると理解しがたい行為の背景にあった観念とは何か、その人類史における位置は何か、という問題であった。それを考察する必要を感じたのは、以下の理由からである。すなわち、台湾原住民族の人々を初め、過去に首狩の慣習を有してきた人々は、現代社会の「常識」から一見不可解であるという根拠のみから、非常にしばしば、いわれなき偏見を受けてきた。そうした偏見や誤解から距離を置き、客観的にこの行為と観念を見直すことが、重要ではないかと考えたのである。幸い、本書に対しては松岡格氏による書評など（2015）、著者の意図を汲んだ受け止められ方が出ている。このたび、台湾でお話しさせていただくにあたり、この辺りをややくわしく説明してみたい。

2 『首狩の宗教民族学』の概要

まず、拙著の内容をご紹介したい。本書は全6章から成る。序章「首狩と日本人」では、日本において8世紀以降、合戦などで敵の首を取り、さらしたり、塚に祀るなどの行為が長く行われてきたことを述べた。そして、こうした〈首取〉のほか、弥生時代の遺跡から発掘される首無し人骨の存在などから、当時〈首狩〉が行われた可能性も否定できない、と論じた。この関連で興味深いのは、『播磨国風土記』讃容郡さよのこおりの記述である。そこには、郡名の由来譚として次のような話が見えている。

讃容と云ふ、所以ゆゑは、大神おほかみい妹妹いも二柱ふたむす、各おのおの競ひて国占めましし時に、妹玉津日女いもたまつひめの命みこと、生ける鹿を捕らへ臥せて、その腹を割きて、稲をその血に種まきたまひき。すなはち、一夜の間に、苗生ふ。すなはち取りて殖うゑしめたまふ。ここに、大神の勅云りたまひしく、「汝妹なにもは、五月夜さつきよに殖うゑつるかも」とのりたまひき。すなはち他あたし処かに去りき。故れ、五月夜の郡なづと号なづけ、神を贊用都比売さよつひめの命と名づく。

つまり、生きた鹿の腹を割いて、稲種をその血にまいたところ、一夜にして苗が生えた。そこで「五月夜」に植えたことから、サツキヨ、縮めてサヨという郡名ができたというのである。

ここでは、鹿の血が稲の生長を促進させている。同様に台湾原住民族のもとにも、人間や動物の血が作物の成長を助ける、という観念が存在した。こういう発想、つまり血が作物をみのらせるとか、豊穰のために死や殺害が前提となるといった思考法は、人類史的に見ると初期の農耕民段階で出てきたも

¹ 本稿で挙げていない典拠については、該書を参照されたい。

のだと考えられている。そして、首狩もそうした世界観にもとづくものと思われる。してみると、弥生時代の日本で首狩が行われていたとしても、さほど驚くことではないのである。

さて、つづく第1章「生業と世界観——宗教民族学の見取図」では、とくにドイツ語圏で発展してきた宗教民族学 (Religionsethnologie) の知見にもとづきつつ、狩猟採集、牧畜、農耕という異なる生業形態には、異なる世界観がともなうことを論じ、首狩は初期農耕ととくに親和的だった、と述べた。このことは後述したい。

第2章「首狩・頭骨・カニバリズム——世界を視野に入れて」は、世界における首狩の分布を概観した章である。世界でとくに首狩が盛んに行われてきたのは、東南アジアとメラネシアであるが、ユーラシア大陸内陸部にも、頭皮剥ぎや髑髏杯の慣習が古くから存在した。たとえば騎馬遊牧民スキタイについて、紀元前5世紀にヘロドトスが記した首級取り・首級盃は有名である。同様の首取はケルトでもなされていたが、バルカン半島では19世紀まで行われた。南北アメリカ大陸では、北米では頭皮剥ぎ (scalping) が広く行われ、南米では首狩が盛んになされてきた。エクアドルのシュアル (ヒバロ) 諸族におけるいわゆる乾し首 (ツァンツァ) はよく知られている。西アフリカでも首狩や人身供犠の後、頭蓋骨や下顎骨が太鼓・ラッパ・笛などの付属品とされたり、家屋や祭壇に懸けられたりしていた。このように、首狩とそれに類似した慣習は世界で広く行われてきた。

その中でも特に資料も多く、アクセスもしやすい東南アジアと台湾原住民の首狩について詳述したのが第3章と第4章であり、全体のまとめとして「なぜ首を狩ったのか? ——農耕・神話・シンボリズム」という終章をおいた。これらについては後述する。

3 台湾原住民族における首狩とその研究史

さて、台湾ではいつごろから首狩が行われてきたのだろうか? 言語学的には、オーストロネシア祖語に、すでに首狩をさすカヤウ (*kayaw) という語が再構されていることから、オーストロネシア語族の大移動によってもたらされた可能性が高い。ちなみに言えば、植崎太郎『太魯閣蕃討伐誌』にも、「本島蕃人に馘首の風習あるは馬來種族古来の通有性を持続せるものにして、寧ろ怪しむに足らざるが如し」と見えている (1914: 21)。なおまた近年発掘された遺物や人骨も、しばしば首狩との関連が推測されている。

文献史料で初見と考えられているのは、『太平御覧』巻780所引『臨海水土志』に見える夷州の記事である。この書は『臨海水土物志』などとも称し、三国時代・呉の丹陽太守であった沈瑩 (しんえい) (?-280) の撰になる。夷州とは呉の孫

権が 230 年（黄龍 2）に遠征を試みた^{たん} 亶州・夷州の一つで、台湾を指すと考
えられてきた。この風俗を記す中に、穿耳・拔齒などと並んで首狩のこ
も次のように見えている。

人頭を得れば^き 斫りて脳を去り、其の面肉を^{はく} 駁し、留めて骨を置き、
犬毛を取りて之を染め、以て鬚眉髪を作り、貝齒を編して以て口を作る。
自から戦闘に臨み、時として之を用うること、仮面の状の如し。此れは是
れ夷王の服する所なり。戦いて頭を得ば、首に着けて還り、中庭に一大材
の高さ十余丈なるを建て、得る所の頭を以て^{さじ} 差次して之を挂く。年を^へ 歴
て下さず、其の功を^{しょうじ} 彰示す。

その後も、『隋書』巻 81 の流求國伝など、台湾を指すものか沖繩を指すか議
論の余地があるものの、首狩の記事を含む史料は数多い。そして 1895 年以後
の日本統治期に、首狩も含む台湾原住民族の調査研究が本格的に進められた。
それらはおおよそ、年代順に 5 つの時期に区分できる。

第 1 期は、台湾が日本に割譲された直後の時期である。とりわけ^{いのうかのり} 伊能 嘉矩
、^{うしのすけ} 森 丑之助、^{りゅうざう} 鳥居 龍蔵の三人は、文字通り手探りの探検を重ねつつ、次第
にこの島の住民たちへの理解を深めていった。彼らの研究はそうした生き生き
した踏査体験と、実地の見聞をもとにした貴重な記録、そしてそこから導かれ
た洞察を含んでいる。

彼らはまた、台湾で首狩がなぜ盛んになったのか、その理由をさまざまに考
察している。たとえば伊能は、清代諸史料の検討から次のように論じた。台湾
原住民が「移殖漢人」、つまり台湾海峡の対岸から渡ってきた漢族系移民を通
じて、銃器を所有するに至ったのは乾隆年間（1736-96 年）中葉以降であり、
乾隆末年には「土蕃中盛に銃を所有する者あり」、かくて「土俗的の一革新」
がもたらされたのである。森も恐らくこの説を受けて、1913 年の講演中、銃
器移入と樟脳製造を（特にタイヤル族における）首狩激化の二要因として、次
のように述べた。

もともと、台湾蕃人に銃器が始めて伝わりました時代は、今より約百
余年前の乾隆末年でありましょうが、これは少数の火縄銃でありました。
新式精鋭なる銃器が多く彼等蕃人の手に落ちしは、劉銘伝〔1885-91 年台
湾巡撫〕が鋭意蕃地の開拓に着手せし頃にあります。……またもう一つ、
多くの銃器が入るようになったのは、首狩りという慣習、元々ある慣習で
ありましょうが、それを一層今のように盛んなるに至らしめたというこ
とは、北蕃〔タイヤル族〕の土地は極めて^{くすのき} 樟が多い、それがために樟脳
を造る、樟脳製造ということは山地の仕事として最も利益ある仕事の一つ
となっております。それがために企業家が競争して各方面に入りまして、
事業家同士競争して、ついには蕃人をして一種の^{へいふう} 弊風を作らせましたよ

うなことで、それらの機会から多数の銃器は蕃人の手に移り、また蕃人がそれらの銃器を得るとともに彼等が悪戯をします。彼等がさまで必要もなき場合にも首狩りするも一種の悪戯です。この悪戯を防ぐために多くの銃器を持った所の防御のための人〔隘勇・隘丁と呼ばれた〕が置かれまして、それらの人が自然に蕃人に接することが多くて、それとともに掠奪されることも多く、中には狡智の商売人は利に迷って、これを蕃人に密売するあり、ついに北蕃に多数の銃器が入り、またそれとともに首狩の弊風をして一層今のようなことにならしめたのであらうと思います。

とはいえ台湾全体を見渡すならば、日本の領台当時、首狩はすでに衰退の道をたどっていた。1900年、伊能が栗野伝之丞と連名で出した『台湾蕃人事情』には、その頃における首狩の状況がたとえばブヌン族についてはこう書かれている。「今や馘首の風ようやく薄らぎ、ある部落のごとき、全くその風を絶てりというも不可なし。もっとも今より六、七十年前の頃までは馘首の風盛んに行われたりしことは、漢人の手に成りし旧記手録の中にしばしば見る所なり」。

第2期の研究は、こうして馘首慣行がある程度下火になった明治末から大正期のものである。臨時台湾旧慣調査会・台湾総督府蕃族調査会によりまとめられた『蕃族調査報告書』全8冊および『番族慣習調査報告書』全8冊という合計16冊の中に、「馘首」ないし「出草」といった項目下、各族の首狩に関する記述が見られる。そこには、第一期の研究よりもさらに仔細に、時に口述者まで明記した上で、その地域における当時の状況が記録されている。たとえばツォウ族サアロア群のように、「馘首の弊習久しく絶えて、その方法を語る者ほとんど無し」というような場合もあったが、首狩の各場面を彷彿させるような生々しい描写も、数多く集められている。

第3期になると、1928年(昭和3)に創設された台北帝国大学を中心として、多くの研究が生み出された。ただしこの時期、台湾では首狩がほとんど跡を絶っていた。たとえば1930年、宮本延人は次のように記している。「生蕃といえは直ちに首狩を聯想する程、台湾蕃族の首狩は有名である。ブヌン族の一部を除いて今日ではほとんど首狩の風習は警察の努力で消滅し、首棚も大部分撤廃され、簡単に見る事は出来ないようになってしまった」。しかし、首狩の経験者はまだまだ多かった。岡田謙によれば、「北ツォウ族はここしばらく首狩を行わない。しかし、現在の壮年男子は多くブヌン族と争い首狩にも出掛けた経験を持っているから、普通言われているような久しい間この風習を忘れていく種族ではない」。そして古野清人も言う、「清国の領有後、ことにわが領台〔日本の台湾領有〕後にこのような蛮風は禁圧されてほとんどまったくその跡を絶つようになったのである。しかし、高砂族の故老のうちには、自ら首狩りの経験を有している者もまだ少なくない。また首狩りに関連する各部族の伝承や祭儀も鮮明に記憶されている」。この時期の研究は、主としてこうした首狩

経験者へのインタビューにもとづいた一次資料と、台湾以外、とくに東南アジアの資料との比較に基礎をおく理論構築とが、結びついている点に特徴がある。

聞き書きから首狩の状況を再現しようという努力は、第4期にも継続された。第二次大戦後、台湾大学考古人類学系と中央研究院民族学研究所が中心となって、台湾原住民調査を進めた時期である。とくに凌純聲りょうじゆんせいや何廷瑞かていずいの研究がすぐれている。しかしこの第4期は、首狩経験者が減ってゆくとともに、首狩の記憶がいわば負の遺産としてとらえられ、タブー化されてゆく時期でもあった。

実はそうした傾向は、戦前からすでに始まっていた。1938年（昭和13）に台湾を訪れた社会学者の河村只雄は、その著『南方文化の探究』に、次のように書いていた。

「台湾の生蕃」というと何人なんびともすぐ首狩りのことや、首棚のことを聯想するであろう。紅頭嶼におけるヤミ族以外の台湾蕃族の歴史には、確かに首狩りがその一特徴をなしている。時にはその特徴をいささか誇張して報道した傾向さえ見られた。麗々しく髑髏の並んだ首棚の挿絵は、高砂族に関する書物にはほとんどつきものの様に考えられたものである。実は私も、蕃地に入ったからには首棚の一つ位は見たいものだ、少しばかり好奇心に駆られていたが、今は首棚などどここの蕃社に行っても影も形も見られない。しかし、唯一つ〔パイワン族〕旧タバサン蕃社の跡に荒廃した首棚が残存しているというので、早速安藤君に案内してもらった。……「生蕃」と呼ばれるのを嫌う昭和の高砂族の青年等は、また首棚を見られることを古疵ふるきずに触られるがごとくに嫌がる。

時は移って1989年、台湾原住民権利促進会のリーダーの一人イバン・ユカンは次のように書いた。我が身を犠牲にしてツォウ族に首狩をやめさせたという〈呉鳳伝説〉が「繰り返し児童に吹き込まれることによって、漢民族の原住民族に対する見方がどれだけ歪められてきたことか。漢民族児童と同様に同じ話を読まされる原住民児童がどれだけ傷ついてきたか。はなはだしくは、首狩りに代表されるマイナス・イメージをみずからのアイデンティティーとしてしまう悲劇がどれだけ繰り返されたことでしょうか」。

1990年代から、おずおずと開始されたかに見える第5期の研究は、まずこうした偏見やタブーから、首狩研究を解放する必要があった。1999年に出た民族学・先史学の金子えりかによる論文が「歴史的な慣習としての首狩、そして、過去を克服する必要」というタイトルを持ち、その末尾で次のように弁明しなければならなかったのは、そうした背景からである。

いま、そのような過去の傷を癒す必要があると私には思われる。原住

民にとって、それは、過去と向き合って過去を克服すること、とくに首狩に関して歴史の脈絡に沿う歪みのない評価をすることで、自分たちの歴史を取り戻すべく民族の記憶を再建しようとするのであろう。私たち多数者の側では、ここ一世紀の間に記録されてきた私たち自身の暴力と比べればおよそ物の数ではないこの歴史上の慣習に対して、偏見に満ちた見方を捨て去ることである。

私は、台湾における首狩という、持ち出すことが長らくタブーであったこの問題に、本稿が一つの風穴を開けたことを十分に自覚している。私は熟慮の上でこの論題を選んだのであり、願うらくは、ここで述べたことが、多くの台湾原住民の友人たちが心に抱え込んできた汚名をはねのけるための一助となってほしいと思う。

金子がこのように呼びかけた同じ年、国立台湾博物館では「文面・^{いれずみ}・^{くびかり}・^{タイヤル}泰雅文化」と題した特別展が開かれ、タイヤル族の入墨や首狩を中心とする物質文化が、正面から取り上げられた。その図録に寄せられた「泰雅族^{いれずみ}・^{くびかり}文化」という論文で、同館の李子寧は「現代人の首狩習俗に対する理解は、多くがいまだに過去における『野蛮な^{ろうしゅう}陋習』といった認識レベルに留まっており、この種の習俗が過去にその文化内で有していた重要な意義をないがしろにしている」と指摘し（李 1999: 98）、主に何廷瑞の論文にもとづきながら、首狩にかかわる物質文化のさまざまな特徴を詳述している。台湾においても、首狩文化の新たなとらえ直しが始まっているのである。

欧米での動向にも触れておこう。現地調査にもとづくツォウ族民族誌でも知られる、ミュンヘン大学の中国学教授トーマス・O・ヘルマンは、論文「本当に『男らしい行い』か？ 台湾オーストロネシア語系諸民族における首狩とコンフリクトの歴史的研究の可能性について」において、主としてオランダ語と漢文による17世紀から19世紀までの史料にもとづき、台湾における首狩の動因や記述につきものの偏見などについて論じ、戦争ないしコンフリクトという枠組みで首狩を捉える可能性を示唆した。またフランス国立科学研究センターのジョージアヌ・コ克蘭は、現地調査に基づく博士論文を『台湾原住民——プユマ族 首狩から現代世界へ』として出版し、過去のプユマ社会における首狩と年齢階梯制の深い結びつきを強調した。さらにオタワ大学の人類学者スコット・サイモンは2012年、セデック族の首狩を民族史の視点から、政治力学のせめぎ合う場として描き出すことに成功している。なお、清朝および台湾総督府の「理蕃政策」における首狩対策、そしてとりわけ〈呉鳳伝説〉を通しての教化政策についても、再検討が進められている。

こうした背景を念頭におきつつ、私はこの本を書いた。そしてまた、今回のシンポジウムでこの論題を採り上げたいと思ったのは、昨年逝去された金子え

りか先生へのオマージュでもあり（日本順益台湾原住民研究会 2014）、また台湾原住民の方々自身に、これまでの偏見とは違った観点を知ってほしいと思ったためでもある。

4 首狩の精神的背景

では、首狩という行為の精神的背景はどんなものだったのだろうか？ 先述したように、ドイツ語圏の宗教民族学によれば、狩猟採集民や牧畜民の世界観は、農耕民のそれとは大きくことなる。狩猟採集民には首狩はないし、牧畜民の〈首取〉ないし戦勝首級の獲得・展示は、狭義の〈首狩〉とは違った精神的背景から来ている。

おそらく最も重要なのは、首を獲得することで、村の平和や秩序が守られ、作物が豊作となり、獲物がよく取れ、病気もなくなる。つまり、首は一種の守護霊となる、という考え方である。これは台湾原住民族だけでなく、東南アジア一帯に広く見られた考え方である。たとえばボルネオ島カヤン族の首長アバン・アヴィットが首狩について語った次の言葉には、そのようにさまざまな幸を村外から村内へもたらすものとしての首狩の本質が込められているように思われる。「それは古い慣習だ。よい、有益な慣習だ。我らの父から、父の父から伝えられてきた。それは我らに恵みをもたらし、豊かな収穫をもたらし、病気を遠ざけ、痛みを遠ざける。かつて我らの敵だった者たちはこうして我らの守護者に、友に、恩人になる」。

19世紀から20世紀前半の東南アジア各地においては、首狩慣行が種々の類似点を有していたのみならず、装飾や芸術、成年式・結婚・葬儀といった通過儀礼、他界観、人身供犠や動物の供犠、作物と豊穰の観念など文化のいろいろな側面と結びついて、全体として〈首狩文化複合〉とも称すべき様相を構成していた。

首狩の東南アジア諸社会における重要性は、すでに幾度も指摘されている。ハイネ＝ゲルデルンによれば「東南アジアにとって非常に特徴的な首狩」は、「宗教生活のほとんど一切の重要な面と社会生活の多くの面とに関連があるということからだけでも、すでにその大きな意義の明らかな社会的・宗教的慣習である」。またクビチェックの表現では「生命力および豊穰の観念複合と密接に結びつき、東南アジアの諸部族社会の社会・宗教生活の重要な側面をなす、首狩と人身供犠」と言われている。台湾原住民についても金子えりかは、「伝統文化における首狩の核心的な価値」と述べた。

しかしそれにもかかわらず、東南アジア各地におけるこの〈首狩文化複合〉を全体としてとらえ、その諸特徴を概観する試みは、ことに日本では非常に少なかった。拙著は、ハイネ＝ゲルデルンやシュースターといった先学に導かれ

ながら、その空隙を埋めることに努めたものである。もちろん、多くの欠点が存在することを私は自覚している。利用した諸典拠に対する資料批判の不足、地域・民族ごとの歴史的・社会的特性の検討が不十分であること、植民地諸勢力と被統治者としての首狩民の政治的関係・歴史的動態があまり扱われていないことなど、思いつくだけでも多くの批判がありうることは承知している。しかし、これらの批判的視点から、首狩という過去の慣習に対する研究が、よりいっそう前進されることを望みたい。

5 当事者の視点へ

さて、昨年 11 月に英国の女性研究者フランシス・ラーソンが『首切りの歴史』という本を出し、本年 9 月に日本語訳が出版された (2015)。拙著を書き上げた時点では、この本はまだ出ていなかったもので、その存在を私は知らなかった。翻訳が出たので一読したところ、いろいろと感じたことがあるので、それに言及しておきたい。この書は、首狩、戦利品としての首、斬首刑、聖遺物としての首、骨相学、人体解剖における首など、人頭のもつさまざまな側面を広く扱った本である。その意味で、かつて病理解剖学者のヘンシェンが著した『頭骨の文化史』(Henschen [1965]) や、2011・12 年にドイツ・マンハイムのライス＝エンゲルホルン博物館で開催された「頭蓋崇拜」展図録 (Wieczorek & Rosendahl Hrsg. 2011) などと似た性格を有している。

ラーソンの本では、ギロチンなどの斬首刑や、太平洋戦争においてアメリカ兵が記念に持ち帰った日本兵の頭骨について、かなり詳しく記述されている。これらは拙著では終章で簡単に触れた部分なので、ある意味では、拙著と相互補完的な関係にあるともいえる。

ただし、第 1 章「首狩り族」について言えば、あまりにも現代的視点から書かれている、という印象を受ける。たとえば南米シュアル族のいわゆる乾し首については、それが土産物としての発展を遂げたことは詳述されているが、彼ら自身が有していた宗教的観念についてはあまりにも手薄である。まるで小遣い稼ぎのために乾し首を作っていたかのような、経済的動機が前面に出すぎている。それは現代の我々には理解しやすい動機かもしれないが、そうした白人との接触以前にはどうだったのか。そうした問いに、ラーソンは十分に答えてくれない。

もう一点、過去の人類学者の営為を「野蛮」として今日的規準から描く傾向が強い。たとえばアルフレッド・コート・ハッドンは、現地人に対しても当時としては比較的偏見の少ない人類学者だったと私は認識しているが、ラーソンによれば手に入れた「頭蓋骨がその女性のおじのものだったと知ったと、ハッドンは愉快そうに書いている」。またハッドンは「現地の人を整列させて頭部

のサイズ測定をすることにも熱心だった」が、「どういう神経の持ち主なのか気が知れない」(ラーソン 2015: 51-52)などと、過度に戯画化して述べている。

過去を現代の規準に照らして審判することには、慎重でなければならない、と私は考えている。現代の我々もまた、未来の規準から審判される可能性から、自由ではない。結局のところ、人間は「時代精神」(Zeitgeist)に拘束されているのである。好むと好まざるとにかかわらず。

宣教師の中にも首狩を熱心に研究した人がいる。オランダ人のアルベルテュス・クロイトは、スラウェシ島トラジャ族の首狩について浩瀚な論文を書いたが、その発端は怒りからだった。つまり彼は、こうした行為に対する倫理的義憤に耐えず、その実態と意義の探索を開始したのである。しかしその結果、トラジャ族には彼らなりの論理や観念があることを知り、それを彼らの視点から記述することに努めている(山田 2015b)。ラーソンの態度とは、大きなへだたりが感じられてならない。

これまでの偏見から逃れ、客観的に首狩を研究することで、意外な側面が見えてくることもある。たとえば台湾サイシヤット族出身で、同族について綿密な研究を進めている趙正貴氏も、首狩についての研究を発表している。それによると、敵の子どもを養子にした事例が知られている。つまりサイシヤット族が漢族集落へ首狩に出た時には、しばしば漢族の幼児を略奪してこれを養子としたことがあった。そして1ヶ月間、その子の父母兄弟の首を取った者とは相見ることなく、後に仲裁者を立ててその子と殺害者との間で和解式を行なった。以後はその幼児に対してまったく侮蔑などの行為はなかったという(趙 2009, 2013: 113-116)。こうした点の掘り起こしについては、台湾原住民族出身の研究者に、今後おおいに期待したいと思っている。

文献

- ・趙正貴 2009 「賽夏族 (Saysiyat) 的出草文化」 趙正貴『賽夏族的歷史文化：傳統與變遷』：139–157. 新竹縣竹北市：新竹縣政府文化局.
- ・——— 2013 「賽夏族的収養習俗」『新竹文獻』 56: 104–116.
- ・Henschen, Folke. [1965]1966. *The Human Skull: A Cultural History*. New York: Frederick A. Praeger. (ヘンシェン、フォルケ『頭骨の文化史』鈴木誠／高橋讓訳、東京：築地書館、1974年)
- ・金子えりか 1999 「歴史的な慣習としての首狩、そして、過去を克服する必要」『台湾原住民研究』 4: 120–138.
- ・ラーソン、フランシス 2015 『首切りの歴史』 矢野真千子 (訳) 東京：河出書房新社. (Larson, Frances, *Severed: A History of Heads Lost and Heads Found*, London: Granta Books, 2014)
- ・李子寧 1999 「泰雅族的馘首文化」 阮昌銳／李子寧／吳佰祿／馬騰嶽『文面・馘首・泰雅文化：泰雅族文面文化展專輯』：98–139. 台北：國立臺灣博物館.
- ・松岡格 2015 「首狩を研究する意義とは」『図書新聞』 3220 号 (2015年8月20日付) .
- ・檜崎太郎 (= 冬花) 1914 『太魯閣蕃討伐誌』 台北：台南新報社台北支局.
- ・日本順益台湾原住民研究会 2014 「追悼 金子えりか先生」『台湾原住民研究』 18: 170-203. 東京：風響社.
- ・Wieczorek, Alfried & Wilfried Rosendahl (Hrsg.) 2011. *Schädelkult. Kopf und Schädel in der Kulturgeschichte des Menschen*. Regensburg: Verlag Schnell und Steiner.
- ・山田仁史 2015a 『首狩の宗教民族学』 東京：筑摩書房.
- ・——— 2015b 「東南アジアの首狩：クロイトが見た十九世紀末のトラジャ」 山田仁史／丸山顕誠 (編) 『喧嘩から戦争へ：戦いの人類誌』 (アジア遊学；189)：161–173. 東京：勉誠出版.